

M E S S A G E

「駅」への想い

かつて、レールに乗って新しい文明や新しい流行が首都から全国に押し寄せてきた。駅はその到着点だった。又いろんな志を抱いて文明開化された都市に向かう若者たちの出発点でもあった。二階建てで石造りの役場や警察署には見劣りする平屋建てでも、その土地と新しい世の中の結び目、新しい暮らしのシンボルだった。そして新旧がせめぎあう世の中で浮沈をあげわった人々が、新たな道を求めてたどり着き、めぐり会う場所でもあった。ただの交通の場ではなく、人生の節目の舞台でもあったのだ。きっと映画『駅STATION』は、そういった時代の最後に当たっていたのかもしれない。舞台となったいくつかの小駅や小列車には、鬱屈した人生を受け入れざるをえない主人公の背景にふさわし

い、時代の流れを黙々と受け入れていくたたまいが感じられたのだろう。

そして文明も流行も各種のケーブルを伝わって、あるいは宙を走って、パソコンや携帯電話へ飛び込んでくる世の中になった。駅はもはやただ交通の機能を支えるだけの建物になってしまった。また一方では新たな都市化の中心となることで交通だけではなく、商店から娯楽施設、文化施設まであらゆる機能を備えた巨大な集合体になってゆく。そこでは人はただすれ違えばかりだ。人生の岐路はパソコンのスクリーンの中で、携帯電話の出会いサイトで選ばれるようになった。旅立ちの希望や帰還の想い入れは、自動車道路の窓外の風景や蛍光灯に明々と照らし出された空港の待合室という画一

的空間に吸い込まれてしまった。

しかし、文化財として保存された駅舎や、たとえば映画『鉄道員』でモルタルの壁を掻き落として旧状を復帰させた幾寅駅に、人々が訪れるのはなぜだろう。過ぎ去った時を懐かしむ気持もあろうが、それだけではなく、駅舎に潜むさまざまな人生の亡霊の中から自分の、家族の、友人の姿が浮かび出てくるのを期待しているのではないだろうか。彼らが希望に胸を膨らませた姿や、引き返そうかと立ち止り躊躇する姿が駅舎を背景に立ち現れてくるのを見る。ひととき、あくせくするばかりの日常から抜け出て、自分がどこから来たかを振り返る時間を望んでいるのではないかと思う。

都市化の中心となっている駅がある一方で、たとえば

降旗康男

Furuhata Yasuo

映画監督

■経歴:

1934年8月19日生まれ。
長野県出身。

〈監督〉

「非行少女ヨーコ」(66年)

「新網走番外地シリーズ」(69年~72年)

「魔の刻」(85年)

「冬の華」(78年)

「駅 STATION」(81年)

〈第5回日本アカデミー賞〉

最優秀作品賞

「居酒屋兆治」(83年)

「夜叉」(85年)

「あ、うん」(89年)

「極道の妻たち 三代目姐」(89年)

「タスマニア物語」(90年)

「藏」(95年)

「現代仁侠伝」(97年)

「鉄道員(ぼっばや)」(脚本99年)

〈第23回日本アカデミー賞〉

最優秀作品賞

最優秀監督賞

最優秀脚本賞

〈第12回日刊スポーツ映画大賞〉

作品賞

〈第54回毎日映画コンクール〉

日本映画大賞

「ホテル」(脚本01年)

「赤い月」(2004年)ほか



上砂川駅(『駅』でロケをした)、富内駅(『鉄道員』でいろんな機器をお借りした)など、全国にはもっとあるだろうが、現実のレールからは切り離された駅舎が田園の中に保存されている。野原にたたまむ駅舎に幻のレールを重ねて視ると、人と人のドラマならぬ自分自身と、ちょっと大げさだがそこを拠点として発展した近代日本の歴史と向き合っている感じがする。おそらく駅舎保存の意図の底にはこのことが強くあったに違いない。

レールを失った駅舎を見ていると、江戸の開国から、明治国家の成立、敗戦、グローバリゼーションへの屈服にいたる変遷、それに振り回された人々の思いを小さな平屋の建物が体現しているかのようだ。

北海道(写真提供: 関口 享)